

書写のきほんを学ぼう

【第20回】 文字の配列① けい線に書く

千葉大学教授 樋口 咲子



書き方教室

今月のもくひょう

今月から文字の配列について学んでいくよ。
 文字の配列とは、文字のならべ方のことだよ。文字の大きさや文字と文字の間のあけ方、行の中心に気をつけて書くといいね。
 読む人が読みやすくなるよう、どこを工夫したらよいか考えていこう。

① どこにもんだいがあるのかな

つぎの書き方はどこにもんだいがありますか。あてはまるものをあとの①〜⑧の中からすべてえらんで、()の中に書きましょう。

例

今日も犬の散歩をしよう。

(②⑥)

今日も犬の散歩をしよう。

()

今日も犬の散歩をしよう。

()

今日も犬の散歩をしよう。

()

- ① 文字の大きさがばらばら。
- ② 文字が大きすぎる。
- ③ 文字が小さすぎる。
- ④ 文字と文字の間のあけ方がばらばら。
- ⑤ 文字と文字の間のあけ方があきすぎる。
- ⑥ 文字と文字の間がせますぎる。
- ⑦ 行の中心が通っていない。
- ⑧ 文字をななめに書いている。

② 文字の大きさ① 文字どうしの大きさ

どの書き方が読みやすいですか。

今日も犬の散歩をしよう。

すべての文字が同じ大きさだね。

文字の大きさがばらばらだね。

今日も犬の散歩をしよう。

これは読みやすいね。

今日も犬の散歩をしよう。

◆かん字とひらがなの文字の大きさ

かん字はひらがなより大きく書くといいね。



◆かん字どうしの文字の大きさ

画数の多いかん字や左右のはらいのあるかん字は、大きく書きます。四角の形のかん字や、画数の少ないかん字は、小さく書きます。

【大きく書くかん字の例】
樹 大
【小さく書くかん字の例】
日 小

◆ひらがなどうしの文字の大きさ

「こ・の・と」は、小さく書くとつりあいがとれます。もともと文字のかたち（たて長・よこ長など）にも気をつけて書きましょう。

【大きく書くひらがなの例】 【小さく書くひらがなの例】

あ は この と

【たて長・よこ長のひらがなの例】

よ へ

③ 文字の大きさ② けい線に対する文字の大きさ

どの書き方が読みやすいですか。

今日も犬の散歩をしよう。

文字が大きすぎるね。

文字が小さすぎるね。

今日も犬の散歩をしよう。

これは読みやすいね。

今日も犬の散歩をしよう。

◆けい線に対する文字の大きさ

右の書き方のように、けい線のはばを五とすると、かん字は四、ひらがなは三のはばになるように書くといいね。

④ 文字と文字の間のあけ方

どの書き方が読みやすいですか。

今日も犬の散歩をしよう。

字間がせますぎるね。

字間が広すぎるね。

今日も犬の散歩をしよう。

今日も犬の散歩をしよう。

字間がばらばらだね。

これは読みやすいね。

今日も犬の散歩をしよう。

◆文字と文字の間のあけ方

字間は、あきすぎて、つまりすぎて、読みにくくなるよ。右の書き方のように、ことばのまとまりがわかりやすくなるように書こう。



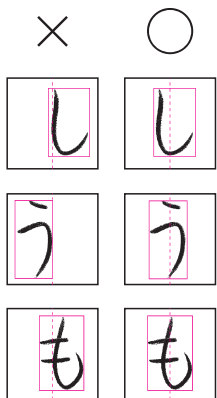
5 行の中心

どの書き方が読みやすいですか。

今日も犬の散歩をしよう。

文字の中心と行の中心とがずれていて、行の中心が通っていないね。

「し・う・も」の文字の中心に気をつけよう。



今日も犬の散歩をしよう。

文字がかたむいていて中心が通らないね。

これは読みやすいね。

今日も犬の散歩をしよう。

今日も犬の散歩をしよう。

文字の大きさがばらばらだと行の中心が通って見えないね。

◆ 行の中心を通すには、二つの方法があります。
A 文字の中心と行の中心を合わせるように書く。

今日も犬の散歩をしよう。

B 文字ごとの左右の空気が同じになるように書く。

今日も犬の散歩をしよう。

Bは文字の中心がわからないときにべんりなやり方だね。



指導のワンポイント

書写学習の目標は、読みやすい文字・文字群を書くことです。字形を整えて書けるようになることは大切ですが、一つ一つの文字が整っていても、多字数並べたときに、必ずしも読みやすい文字列になるとは限りません。書いている内容をよく理解し、意味のまとまりとしての言葉が伝わりやすい配列を意識して書くことが大切です。

日本語の文は自立語と付属語（助詞・助動詞）

からできています。自立語は内容を伝える語句ですから、自立語を目立たせて書くことで速く意味が伝わりやすくなります。自立語は漢字で書かれることが多いため、漢字の方を大きく書きます。片仮名も、名詞として書く場合は、大きめに書いたほうが伝わりやすくなります。

行の中心が通っていると読みやすくなりますが、行の中心を通すのは大変難しいことです。文字の中心を行の中心に合わせていきますが、文字の中心がどこなのがかわからないと合わせることができません。日常生活において、手本が無い状況で普通の速さで書くとき、必ずしも中心の通った文字が書けるとはかぎりません。教科書の手本のような文字を皆がいつでも書けるわけではないのです。書道展では何枚も練習して中心の通った字形を目指しますが、日常生活では、ある程度の速さで一回で書く場面がほとんどです。そこで、本頁のパターンBを御覧ください。これは、行の中心を通すために罫線内に文字を書いたときの左右の空気を同じにする方法です。この方法ですと、文字の中心がわからなくてもまっすぐ書くことができます。また、パターンAのように中心線に合わせて書いても、本頁左上の例のように、文字の大きさがばらばらになってしまつと、結局中心が通って見えなくなります。パターンBの方法ですと、行の中心と文字の大きさの両方に注意して書く練習ができます。

目的に合わせて、いろいろな練習方法を試してみるとよいでしょう。

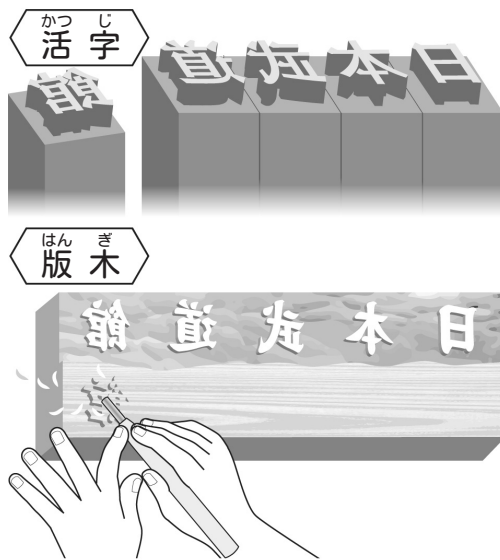
文字文化を知ろう

印刷の歴史と手書き文化

印刷は、同じものをたくさん作ることができて、とても便利ですね。印刷はいつごろから始まったのでしょうか。

印刷は中国で始まり（七世紀）、活字（文字が凸状に彫られたハンコのようなものです）の発明も中国です（十一世紀）。活字を使う活版印刷で文章を作る場合は、大量にある活字の中から使う文字を探して文章のとおりに並べます。中国や日本は文字の数が多いうえに字形も複雑です。また、大量の本をつくるためには、何度も使えるしようぶな金属活字が必要でした。そのため、中国や日本ではおもに、木の板に凸状に文字や絵を彫った版木を用いて印刷する木版印刷が行われていました。一方、文字数の少ないヨーロッパでは、十五世紀にヨハネス・グーテンベルクが活版印刷術を発明して多くの書物を出版し、ルネサンスや宗教改革、科学革命をおしすすめるのに役立ちました。

さて、日本でも古い印刷物は、奈良時代の終わりごろ（七七〇年）に印刷された「百万塔陀羅尼」です。仏教によって国を守り安定させるために、十のお寺に百万巻のお経を納めました。世界に残る最も古い印刷物としても有名です。その後二百年間、日本での印刷は



まったく行われませんでした。文字を読み書きできるのは、貴族や僧侶など一部の人がただだったので、印刷してたくさんものを作る必要がなかったからです。仏教を広めるために必要なお経は、奈良時代には、国が運営する写経所で、写経生とよばれる字の上手な、選ばれた人たちが書いていました。平安時代には、貴族や僧侶も、祈願や供養のために書くようになりました。また、『源氏物語』など平安時代の物語や和歌も、手で書き写されたものが貴族の間で読まれていた

のです。歌人として有名な藤原定家は、たくさん古典文学を書き写して後世に伝えてくれたことでも有名です。

平安時代の終わりから、印刷は、お経や勉強に必要な本を中心に、一部の人のために行われていましたが、江戸時代になると盛んに行われるようになります。経済活動が活発になり、読み書きができる人が他の国と比べものにならないくらい多くなったからです。寺子屋とよばれる勉強を教える場所がたくさんできて、子どもたちもよく勉強しました。一般庶民が文字を書き、本を読むようになったのです。こうしたことは、当時、世界でもめずらしく、日本は教育レベルのとても高い国でした。多くの本が必要になったので、印刷屋・本屋・貸本屋がたくさんできました。本の内容も、お経や勉強に必要な本だけでなく、人々が楽しんで読める物語や暦、番付、名所案内など、幅がひろがりました。この頃まで、印刷の方法はおもに木版印刷です。

江戸時代が終わりに近づいたころ、西洋の活版印刷技術が日本に入ってきました。「印刷機」は外国のものを使えますが、「漢字」「ひらがな」「カタカナ」という日本語を表す文字の活字は自分たちでつくらなくてはなりません。これに成功したのが本木昌造です。本木が指導した新しい印刷技術は数々の本を世に送り出し、明治時代に日本が近代国家への道を切り開いていく原動力となったのです。